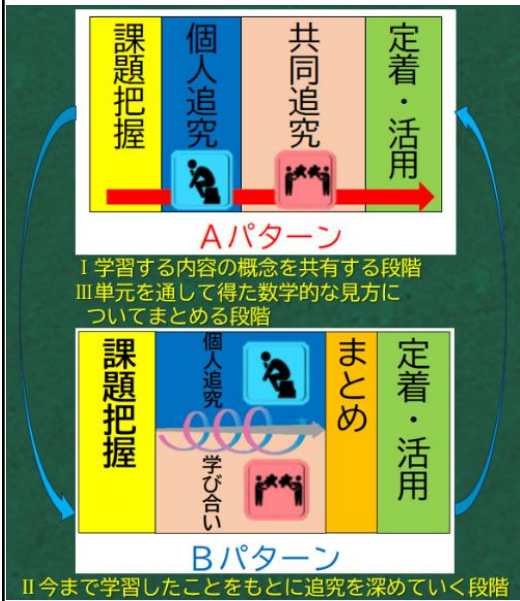


個別最適な学びと協働的な学びの一体化を目指した算数の授業のあり方

実践内容



今までの授業を変えよう

‘学びの孤立’を生まないために教師が追究場面を区切るのではなく、子ども自身が学習問題や時間に応じて、個人か学び合いかを決定して追究する形の授業を単元に取り入れる取組に挑戦した。結果、三年間の積み上げによって、みんなと同じ土俵に乗っている安心感の中で追究する子どもの姿が見られるようになった。そして、現在、学校全体に学び合いの風土が確実に広がりつつある。

一年次
二年次
三年次
三年間の積み上げ



学び合いの場面における教師の出

学び合いの場を重ねてきたことで、**教師の出**

- ①わからない子どもが分かりたくて動く姿
- ②もう一つの解法を知りたくて動く姿
- ③答えが合っているかどうか確かめたくて動く姿

を通して、子どもたちの数学的な見方・考え方に繋がる言葉を適宜拾い、それを全体に広げていくファシリテーターとしての教師の役割が見えてきた。

様々な学習ツールを提供しよう

端末上で試行錯誤して追究したり、友だちの考えを参考に思考整理したりすることができるICTツールの良さ。五感を使って確かな手応えを得ることができるアナログツールの良さ。両者とも子どもたちは十分理解している。そのことを踏まえながら、追究の道筋において、子どもたちがどんなツールを必要とするのか事前に予想して用意することも教材研究として大事な部分であることが実践を通して見えてきた。



「追究の余白」を提供しよう

これまでの課題として、教師主導になりやすかった「まとめ」「定着・活用」の場面を改善するために‘時間’に着目した。一つ目は「+15分」の余白の時間を使い、「まとめと定着の問題」にじっくり取り組む授業スタイル。もう一つは「+1時間」の余白の時間を使い、前時の学びを活かして発展的な問題に取り組む授業スタイルである。実践を重ねる中で、子どもたちが自分の力で数学的な見方・考え方を広げながら追究することができる「追究の余白」の価値を学んだ。

成果と課題

数値から「学びに向かう力」の向上 今の子どもの姿から

今年度の総合学力調査において各層の割合の改善とともに、学びに向かう力、自ら学ぶ力など学力【知識・技能】【思考・判断・表現】の土台となる力が、どの学年も全国平均を上回り、昨年度と比較しても、プラスという結果を得ることができた。

～校長先生のお話から～中学校の授業参観後にどのクラスも小山小の子どもたちが主体的に取り組んでいた。特に、「それってこういうことかな」「だったら、こういうことも言えるじゃん」等、全体が立ち止まり追究を深める、あるいは協働的な学びに誘うきっかけとなる発言を、小山小の子どもたちが発信していた。本校の取組が本校で完結せず、中学に行っても、さらにその先を含め、学びに向かう力となっていることを実感した。

持続可能なものへ

ここまで挑戦した新たな実践を‘一過性’にせず、本校のシンボルの柵の木のように大きく‘持続可能’なものへと発展させるために、どのような意識で学校全体で取り組んだらいいか考えたい。

